

令和 8 年 5 月 8 日

令和 7 年度 特別の教育課程の実施状況等について

学 校 名	管理機関名	設置者の別
京都教育大学附属桃山小学校	京都教育大学	国

1. 学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学 校 名	特別の教育課程の編成の方針等の 公表 URL
京都教育大学 附属桃山小学校	https://www.momosyo.com/%E6%95%99%E8%82%B2%E6%96%B9%E9%87%9D/

※必要に応じて行を追加すること。

2. 学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
京都教育大学 附属桃山小学校	https://www.momosyo.com/%E6%95%99%E8%82%B2%E6%96%B9%E9%87%9D/	https://www.momosyo.com/%E6%95%99%E8%82%B2%E6%96%B9%E9%87%9D/

※必要に応じて行を追加すること。

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

・計画通り実施できている

・一部、計画通り実施できていない

・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

※(1)で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

・実施している

・実施していない

＜特記事項＞

- ・ 育友会総会や学校だより等の場面で本校独自教科の設定を含む教育課程の特例について説明するとともに、年間の参観日等、授業公開において積極的に独自教科を実施したり、学級通信などでメディア・コミュニケーション科の学習の様子を知らせたりするなど発信に努めている。
- ・ 入学希望者対象に行う学校説明会では、本校教育の大きな特徴として教育課程の特例について説明している。

4. 実施の効果及び課題

（１）特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

本校では、メディア・コミュニケーション科（以下、MC科）の目標として「社会生活の中から生まれる疑問や課題に対し、メディアの特性を理解したうえで情報を収集し、批判的に読み解き、整理しながら自らの考えを構築し、相手を意識しながら発信できる能力と、考えを伝え合い・深めあおうとする態度を育てる」と設定している。その中で①「21世紀型情報活用能力」の育成を図ること、②メディアとコミュニケーションを一体とした指導を行うこと、③課題解決を主体とした指導を行うことを重要な方針として実践を重ねてきた。保護者等からは、近年そしてこれからの社会を生き抜く子どもたちに対して本教科の設定や目標に共感する声が多く、授業参観や家庭での様子から、ICT活用スキルだけでなく情報活用能力やコミュニケーション能力の向上に対して肯定的な評価を得ている。家庭においても、論理的に理由を話す姿や、自分の考えを発表する過程が子どもたちの自信につながっているといった声も寄せられている。また、研究発表会の参加者からも、子どもたちがメディアの特性を理解し適切な使い分けができている点や、相手を意識しつつ批判的・対話的な学びを深めている点について高く評価されている。

一方で、安易な情報の活用やICTの負の側面を懸念する声もある。アンケートからは、休日や放課後のSNS等における相手意識を持たない発信によるトラブルへの懸念や、低学年を中心とした視力・姿勢など健康面への影響を心配する声が寄せられている。また、子どもたちの成長の点で、メディアの特性理解やコミュニケーション能力育成に関してさらに検討の余地があるとの意見もある。今後、多様なメディアが登場しても、それに適切に対応できる基盤を築くための取り組みや、情報モラルに関する継続的な指導が引き続き求められている。

（２）学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

新学習指導要領において「学習の基盤となる資質・能力」と位置付けられている情報活用能力の育成に向け、本校ではMC科を独自教科として設置し、既存の教科等に散見される教育的内容の「補充・深化・統合」を推進してきた。特にコミュニケーションに注目し、批判的思考を強化する取り組みの意義は大きい。これまでの研究を通じて「情報活用能力の体系表」と本校独自の21世紀型情報活用能力との関連を明確

にし、カリキュラムマネジメントの視点から指導内容を再整理してきた。その結果、MC 科での課題解決型の学習過程や、批判的・論理的思考力の強化が、他の教科の学びを深化させる副次的効果を生んでいることが確認されている。

一方、保護者アンケートからは、学校の研究に対する取り組みへの評価は高いものの、子どもたちの実際の能力向上や日常生活での応用に関してはまだ十分とは言えないとの声が上がっている。便利なツールを使うことで「それらしい成果物」が容易にできてしまうため、取り組みの意味を本人がどこまで理解できているか、成果物だけでは判断しにくいという指摘もある。単なる資質・能力の強化にとどまらず、ICT メディアに依存しない思考力を養う時間との両立を図りながら、実際の生活や社会における課題解決を意識した学びを取り入れ、真に「使える力」としての情報活用能力とそれに伴う態度の育成を目指していく必要がある。

4. 課題の改善のための取組の方向性

児童自身は、自らの課題に主体的かつ積極的に取り組む姿勢を持っており、意欲的に学習に取り組むことができている。MC 科で育まれた資質・能力は、他の教科や総合的な学習の時間、日常生活のさまざまな活動の中でも活かされている。通信機器が身の回りに溢れる現代において、望ましい活用方法や相手を意識した効果的な情報活用能力の重要性は増しており、学習の成果は日常生活の中でその力がどれだけ発揮されるかによって評価される。

今後は、新たなメディアである生成 AI について、現在高学年で単元を新たに作成中であり、今年度中に実施・発表していく予定である。こうした実践内容の追加や、「情報科」の要素を組み込みながら、カリキュラムマネジメントの視点から指導内容や方法の改善を進めると共に、実践的な場面での向上を意識した教材開発や単元の展開を検討する。加えて、本年度の課題を踏まえ、以下の点についても改善を図っていく。

・発達段階に応じたメディア活用

低学年では紙媒体を中心にするなど発達段階に応じて柔軟な仕組みを選択し、時には「デジタルメディアを使わない」という選択肢も示しながら、ICT に依存しない思考力の育成にも努める。

・情報モラルと健康への配慮

相手意識を持った適切な情報発信のあり方について継続的に指導するとともに、視力や姿勢など身体面への影響への配慮も促す。

・形成的な評価の充実と家庭との共有

成果物だけでは見えにくい子どもたちの実際の変容を丁寧に見取り、指導方法の改善に努める。また、授業参観等を通して MC 科の具体的な学びの内容を保護者へ積極的に公開・発信し、外部からのフィードバックを取り入れながら教育のさらなる充実を目指す。